

# ISO/IEC/JIS Plastics

事務局便り 2016 年 4 月

## 第 26 回 ISO/TC 138 国際会議

### 1. TC 138 の構成

TC 138 (プラスチック管・継手) は、日本が幹事国 (TC 議長及び幹事) となっている。(表 1) に構成を示す。TC 138 傘下には日本が幹事国を取る SC 8 を含め、8 個の SC で構成されている。

(表 1) TC 138 の構成

セクション	内容	幹事国
TC 138	プラスチック管・継手	日本
WG 8* *TC 138 直轄の WG	管の基本寸法	
SC 1	廃下水用プラスチック管・継手	フランス
SC 2	給水用プラスチック管・継手	スイス
SC 3	工業用プラスチック管・継手	イタリア
SC 4	ガス供給用プラスチック管・継手	オランダ
SC 5	試験方法・基本規格	オランダ
SC 6	強化プラスチック管・継手	オーストリア
SC 7	プラスチックバルブと補助器具	イタリア
SC 8	配管更生	日本

SC 1～SC 4 は管の用途別で区分されており、SC 5 は管に関する試験方法、SC 6 は強化プラスチックを材料とした管及び試験方法、SC 7 は管の周辺器具となっている。これらに対して、SC 8 は「配管更生」という特異のジャンルである。

### 2. TC 138 の活動状況

各 SC の活動状況の指標として、今までの規格発行数及びこの 1 年間の審議件数を(表 2)に示す。

(表 2) 規格数及び審議件数

	規格数 1)	審議件数 2)
WG 8*	0	0
SC 1	0	4
SC 2	1	5
SC 3	2	4
SC 4	1	3
SC 5	12	5
SC 6	2	5
SC 7	1	1
SC 8	8	4

1) 2015-12-31 までの規格発行数

2) 1年間(2015-01-01～12-31)の件数 (定期見直しは除く)

2015年の審議件数はSC別ではSC7を除き横並びである。

日本が幹事国を務め注力しているSC8「配管更生」は、2015年の審議件数は他のSCと大差はないが、2015年の国際会議で多数のPWI(予備提案)、NWIP(新業務項目)が承認され、今後活発な審議が期待される。

TC138は元来欧州中心であり、議論の場を広げる方策の一つとして、国際会議(年次会議)の開催場所を欧州と非欧州とで交互に設定している。前回の第25回同国際会議は韓国ソウルで開催されたので、2015年開催の第26回国際会議は欧州開催となり、ドイツ・ベルリンで開催された。

### 3. 第26回TC138国際会議の概要

第26回ISO/TC138国際会議は、10月12日～16日の5日間にわたり、ドイツ・ベルリンにて開催された。参加者は33カ国123名であった。今回は欧州開催ということで参加者は昨年ソウル会議の21カ国72名と比較すると大幅増となった。一方、日本からの参加は12名と前回と同数であった。

会議は、8つのSCとその傘下のWGのうち13個のWGが会議を開催し、開発中の規格、2015年定期見直し規格、新規提案について討議が繰り返された。そのうち、SC3(工業用プラスチック管・継手)の総会で、耐圧ポリエチレン管に関する国際標準化について予備提案が行われ承認された。

会議4日目にはAG(諮問グループ)会議が開催された。会議最終日には、TC138の総会が開催され、各SCからの会議報告とTC138が抱える問題を討議した。そこで2017年のTC138国際会議開催を引き受けでスイスから申し出がありこれを了解した。しかし、2018年以降は会議開催の引受国はなくTC138としては開催国探しを引き続き大きな課題となった。一方、2015年でSC5議長の任期が満了となるMr.Vanspeybroeckの後任に、Mr.Kratochvillaが推薦され承認された。

### 4. 今後の取り組み

2015年1月に、国内TC138委員会が開催され、今回のTC138国際会議の報告をすると共に、今後の日本の対応を議論した。

SC3の耐圧ポリエチレン管に関する国際標準化については、NWIPの提案に向け準備を進めることとし、SC8(配管更生)については、NWIPに対しこれを取り進めるWG会議に日本からエキスパートを参加させ日本の主張を十分に反映した規格開発を進めると共に、SC8国内委員会で将来の新規日本提案に向け、検討することとした。

次回2016年の第27回ISO/TC138国際会議は、京都での開催が予定され、準備を進めている。例年は海外での開催のため日本からの参加は限られたメンバーの出席であったが、京都会議では多数の関係者の参加も可能である。日本からの新規提案や、日本が支持し影響度の大きい規格案件の審議が予定されるので、京都会議が日本にとってTC138の規格開発の弾みとなるよう、十分な準備が必要と考える。

以上